



写真-1 志文川左岸から三方里山を撮影（令和元年5月）

■ 出雲街道・因幡街道の宿場町として、また三日月藩の中心地として栄えた乃井野

写真-1 は、JR 姫新線・三日月駅の北西にある三方里山※¹（さんぼりさん）を志文川（しぶんがわ）の左岸側から撮影したものです。志文川の右岸側を JR 姫新線が走っていて、その姫新線の向こう側を並行して国道 179 号が走っています。

ここ佐用町乃井野（のいの）は、古くから出雲街道や因幡街道の宿場町として栄え、元禄 10（1697）年には美作津山藩・森家の改易に伴い、分家だった森長俊がこの地に移住、立藩します。三日月藩初代藩主となった長俊は、領地を治めるため、乃井野にある庄屋・井上家の屋敷地を陣屋と定めます。この屋敷地は、山と川に囲まれ、防御面で優れています。陣屋の建築は 2 年がかりで完成しています。



写真-2 乃井野陣屋跡（北側）



写真-3 乃井野陣屋跡（南側）



写真-4 「旧三日月藩郭内之図」(「旧三日月藩乃井野陣屋跡周辺案内図」から引用・加工)

以後、乃井野は明治まで 9 代 174 年間、三日月藩一万五千石の政治・文化の中心地として栄えました。今でも、このあたりには「御殿山」と呼ばれる山があります。

明治維新の廃藩置県により三日月藩は廃藩となり、藩主の森家も華族となって東京に移り、陣屋はその役目を終えました。明治 10 (1877) 年からは小学校として使われたそうです。

写真-4 は、乃井野陣屋跡に掲示されている「旧三日月藩乃井野陣屋跡周辺案内図」から引用した「旧三日月藩郭内之図」で、幕末から明治時代初期頃の陣屋町が描かれています。

※1 三方里山：標高 186m。山頂は、幕末に三日月藩が 3 年かけて家臣を訓練する演武場を造成している。現在はその史跡を保存する一方、「三方里山公園」として整備されている。

■ 志文川の激流が蛇行・侵食して造り上げた環流丘陵

千種川の左支川・志文川も千種川同様にかなりの急流河川で、蛇行を繰り返しながら流れています。その志文川沿いにも、乃井野や上流の栄栗市山崎町大沢に典型的な環流丘陵があります。

① 佐用町乃井野

JR 姫新線・三日月駅の北西約 600m にある小高い丘が三方里山と呼ばれる環流丘陵です。志文川の旧河道は、乃井野陣屋跡の前を通り三方里山の北側を回って流れていましたが、いつの頃から三方里山の東側でショートカットされています。

この付近では、三方里山という比較的規模の大きな「環流丘陵」と、その下流の末廣地区でほとんど高さのない丘陵を持つ「環流丘陵」が隣り合っています。

三方里山では、三方里山頂と旧河道との高低差が 40m を超えている(図-2 参照)のに、末廣では環流丘陵と思しき所と旧河道との落差が 5m 程度しかありません(図-3 参照)。

志文川の河道が、蛇行を拡大していく過程で、側方浸食と並行して下方浸食も行っていた結果、丘陵が残ると思われませんが、残った丘陵が小さいということは、下方浸食の力が弱かったということでしょう。





図-2 乃井野の横断面図



図-3 末廣の横断面図

先ほど、環流丘陵と旧河道との高低差について述べましたが、今度は旧河道とショートカット後の新河道の高低差について比較してみます。

乃井野では、現河道が下方侵食された結果、旧河道と約 26m の高低差を生じています (図-2 参照)。一方、隣接する末廣地区での高低差は、約 12m です (図-3 参照)。

隣接地でありながら、これほどの差が生じた原因は何なのか。河床勾配はどうか、角亀川合流による流量の変化はどうか、等々興味は尽きませんが、言及はこの辺で……。



写真-6 久保大橋付近から末廣の丘陵地を撮影

② 穴粟市山崎町大沢

JR 姫新線の三日月駅から一般県道 154 号・千種新宮線を北に 15.5km 行った所の穴粟市山崎町大沢字段に明瞭な環流丘陵地形があります。ここでは、旧河道と現河道との高低差は約 30m もあります。ただ、写真-7 からわかるように、車で走っていても、これが還流丘陵だとは気づかないと思います。

大沢の環流丘陵について、筆者は丘陵の向う側には行っていないですが、地図を見ると、20 戸ほどの人家があるようです。



写真-7 穴粟市山崎町大沢地区の環流丘陵

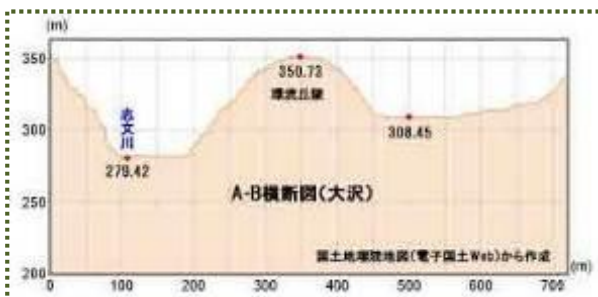


図-4 穴粟市山崎町大沢の横断面図



図-5 穴粟市山崎町大沢付近の地図

ただ、丘陵の南端に朱色の鳥居があったので写真だけは撮って帰りました（写真-9）。

後で調べてみると、ここは大岩稲荷神社で、下記のような由緒がありました。

お稲荷様が祀られたのは昭和2（1927）年で、祀られているのは「正一位大岩稲荷大明神」です。

新宮町の千本（せんぼん）（現・たつの市新宮町千本）に大川稲荷さんがあります。ここのお稲荷さんの当時の女神主さんに神様より次のようなお告げがありました。

「福島与左衛門重則の霊が雨乞岩の上に留って帰れないでいる。彼は元鳥取藩士であるが、所用あって当地に赴き、この地で病魔に犯され、享保2（1717）年2月24日死去した。しかし武士の魂である刀と鎧兜がこの近くに残っているので霊が動けないでいる。この刀と鎧兜を御神体としてお祀りすれば、霊験灼（あ）らかな神様となり、諸々の願い事を叶えてくださるであろう。」とのことでした。

そこで当時の大沢集落の一同が拳（こぶ）って現在の地にお祀りすることとし、件（くだん）の刀と鎧兜を近くの農家から寄付して頂き、これを御神体として、さらに京都伏見の稲荷山の大岩稲荷の分神をお迎えして盛大にお祀り込み※2の祭礼を致しました。

その後、毎年春と秋の2回、お祭りが村を挙げて行われ、近辺の町村からも大勢のお詣りがあり、屋台も並んで賑やかな祭りが長年続いたのですが、時代の移り変わりとともに訪れる人も少なくなりました。それでも毎月1日と15日には村人が大勢参っておられます。

今も御神体の刀と鎧兜は、本殿にお祀りしてあります。なお、お堂横手には、福島与左衛門重則の碑が建っています。

以上が「神秘と感動の絶景を探し歩いて」というホームページに掲載されていた古老のお話ですが、いくつか気になる点があります。

一つは、なぜ鳥取藩士が当時の山崎藩の領地にやってきたのか、という点です。山崎藩は、姫路藩初代藩主・池田輝政の四男・輝澄を藩祖としています。寛永17（1640）年に家老同士の対立がお家騒動に発展し（池田騒動）、輝澄は改易、甥の鳥取藩主・池田光仲預かりとなります。輝澄は徳川家康の外孫ということもあって、鳥取藩内の鹿野において堪忍料1万石を与えられています。ということで関係なくはありませんが、少し時代がずれています。

今一つは、享保2（1717）年といえば、それなりに平和な時代です。刀は理解できますが、鎧兜を持っていたのはなぜでしょうか。戦が始まるわけでもあるまいし……。

※2 お祀り込み：尊いものとしてある場所に安置して祭ること。



写真-8 大沢市山崎町大沢付近の空中写真



写真-9 大沢市山崎町大沢の大岩稲荷神社の鳥居

■ 環流丘陵形成の要因

『SUITE～ひょうご水の文化誌』の中に「漆野の環流丘陵」に関する以下のような記述があります。

環流丘陵の成因について要約すると、「環流丘陵は、川の曲流の仕方、川の流れの勢い、侵食される山の岩質とかの条件がそろわないとできない。

兵庫県では千種川沿い山崎町大沢（現・宍粟市）、三日月町三方里山（現・佐用町）などこの付近に限られている。準平原が造られた時の平らな大地の上を曲がりくねっていた川が、岩石の硬軟分布と微妙に重なり合ってきたと考えられる。この地形が見られるのは、ほとんどの場合、古生層中の形成年代がはっきりしない粘板岩地帯だ。それが何を意味するのか今後の研究課題だ。」

上記の記述は、恐らく神戸大学名誉教授の田中眞吾先生が執筆、あるいは監修されていると思われますが、田中先生も当地域に環流丘陵がまとまって分布する理由については「今後の研究課題」と述べておられます。

その中で、環流丘陵地形が見られるのが「粘板岩地帯」とありますが、このことについて『兵庫県地質図』の千種川上流域に環流丘陵をプロットしてその分布状況を見ると、環流丘陵が存在する箇所は、宍粟市山崎町大沢を除いて、いずれも古生代ペルム紀・超丹波帯地層群の粘板岩、頁岩、頁岩・砂岩互層、混在岩が分布する地域です。

また、大沢地区は中生代白亜紀の生野層群下部累層で、流紋岩質多結晶溶結凝灰岩、頁岩、砂岩、凝灰岩が分布する地域です（図-6 参照）。

上記岩種の中で気になるのが、粘板岩や頁岩、泥岩です。これらの岩は、「スレーキング（slaking）」といって、乾燥と湿潤の繰り返しによって鉱物粒子間の結合力が失われて、次第に脆くなる性質があります。

その理由として、

- ① 水分の浸入が間隙中の空気を圧縮し、岩塊や土塊中に引張力を生じること
 - ② 土粒子の水分吸収により粒子間が広がり、粒子結合が低下すること
- が考えられています。

水際の岩盤は乾湿の繰り返しを伴うことから、スレーキングによって脆くなり侵食がより早く進行する可能性が考えられます。

ダム建設時にこのような岩盤が出てくると、仕上げ掘削後速やかにコンクリートを打設するか、それができない場合は一旦モルタル吹付を行うなどして、岩盤が早期にボロボロにならないよう工夫しています。

この種の岩は、県下至る所に分布しているので、田中先生が言われているいくつかの条件の一つに過ぎません。

RL2011 に掲載されている4ヶ所の環流丘陵のうち、②、③、④には段丘地形が含まれ、④には蛇行による河川争奪が河岸段丘にも見られるそうです（『ひょうご水百景』No.120に記載）。

地盤の隆起、河川の侵食作用が気の遠くなるような時間の経過の中で、どのように絡み合って今の地形が出来上がっているのか、筆者の想像力ではどうしようもない、といったところです。



図-6 千種川上流域の地質図

なお、環流丘陵ができる一歩手前の状況が JR 姫新線・上月駅東の佐用川に見ることができます（図-6 の赤の破線で囲んだ箇所）。

■ モノローグ

環流丘陵地形は、空中写真を見てはじめて理解できるもので、地上をいくら動き回ってもなかなかわかるものではありません。今回は、「鳥の目」で視ることの重要性を再認識しました。地形に限らず、時には「鳥の目」でモノゴトを視ると違ったモノが見えてくるかも。

写真-10 は、令和元（2019）年 5 月上旬に乃井野陣屋前のルピナス園で撮影したルピナスの花です。約 40a の休耕田を活用して植栽された約 8 千本のルピナスが、陣屋館を訪れる人たちの目を楽しませてくれます。

ルピナス

南北アメリカ大陸原産のマメ科ルピナス属の多年草。ルピナスの名は、吸肥力が非常に強い特徴を貪欲な狼にたとえたもの。和名はハウチワマメ属（葉回馬豆属）。古くは食料・肥料として利用され、日本には明治時代に緑肥作物として導入されたが、現在では観賞用として栽培されている。春から初夏にかけて、雄大な総状花序をなし、蝶形花を多数咲かせる。花の様子がフジに似ており、花が下から咲き上がるためノボリフジ（昇藤）とも呼ばれる。白花ルピナス豆の塩ゆでは、地中海地方でピールのつまみの定番として知られる。



写真-10 『乃井野陣屋跡』前のルピナス園で撮影

【参考資料】

- 1 『河川的作用による地形』 国土交通省国土地理院 HP
- 2 『兵庫県版レッドリスト 2011』 兵庫県 HP
- 3 『ひょうごの駅～No.31 三日月駅』 兵庫県民共済 平成 28 年 10 月
- 4 『兵庫県：千種川水系の千種川と志文川の環流丘陵』 日本の地形千景プラス HP
https://web-gis.jp/GM1000/SelfSelect/Self-Select_163.html
- 5 『SUITE～ひょうご水の文化誌』 兵庫県企画部 平成 6 年 3 月
- 6 『兵庫の地質』 兵庫県土木地質図編纂委員会 平成 8 年 3 月
- 7 『雨乞岩（宍粟市）・死亡した武士の霊が籠った巨石』 「神秘と感動の絶景を探し歩いて」 HP 平成 30 年 12 月
<https://sazanami217.blog.fc2.com/blog-entry-591.html>
- 8 『土木用語辞典』 技報堂 平成 11 年
- 9 『ルピナス属』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発行：令和 3（2021）年 2 月 『ひょうご水百景』 No.121

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.121